

## 随想

# バブル期以来の低失業率

## 若者に生きがいを与えられる職場に

(株) P P Q C 研究所 加藤 宏光

ある農場へ向かう途中の車中で、NHKのラジオニュースを聞いた。平成二十七年五月末時点での完全失業率は三・三%だそうである。これは二三年ぶりでバブル期以来の低率である、と伝えていた。

著者がP P Q C研究所を設立して間もない頃、やはり失業者は少なく、養鶏産業を含む畜産業や工業生産部門等は3K(汚い、きつい、危険)と呼ばれ、求人が難しかった。また、厳しい求人事情から人件費はうなぎ登りで、このため採卵産業の機械化が急速に進展した。

現在の労働市場は、当時とは少し趣を異にしている。失業率は低いというものの、六千数百万人の労働人口のうち、非正規

労働(パートタイム労働や派遣労働)に甘んじる比率が二五%に近い。

もちろん生産規模を拡大するため作業を機械に代行させる流れは必然であったとはいえ、3Kと労働者に疎まれたために機械に代替された作業は配餌、集糞、集卵等の画一的に行える作業全体に及び、人間の作業はそれを補完するに止まるのが実情である(もちろん、人間だからこそこできる流動性のある作業ゆえ、そこに人が配されるのではあるが……)。本「随想」シリーズで、この皮相をチャップリンのモダンタイムスに対比して述べたことがある。

五月二十九日の米ドル相場は一二四円に近い一二三円台であ

り(ユーロは一三六円)、日経相場は二万三五〇円ほどの活況を呈している。日経上場の会社数が増え、平均値の意味がバブル期とは様変わりしていることを勘案すれば、この日経は三万円を越えたバブルのそれに匹敵するという。労働力不足は経済

活況の繁栄と理解できる。しかし、今回が往年の労働力不足と異なるのは、二五%にも及ぶ非正規労働人口である。そうした社会環境においてなお、3Kの畜産業界への就職希望者は多くはない。しかし、硬直化した都会の労働環境にくたびれた若者達が少しずつ農場勤務を求めて来始めた。多分、都会で非正規勤務をしながら時を経て、社会保障を得られず、ついにはホー

ムレス、生活保護といった救い難い道筋を歩んだ人生の先輩たちのストーリーをテレビや週刊誌等が積極的に取り上げ、「それより恵まれているかもしれない」という本能的な感性で飛び込んでくるのであろうか?

現在若い人が社会人として生きて行く上で、どのような夢が描けるのだろうか? テレビ特集等で、自分の道をひたすら切り開くべく活躍している若者が紹介されている。一見その数は多いように感じられる。テレビで取り上げられるぐらいニュース性がある生き方は、誰の目に映っても夢を感じさせる。著者なども、このような若い世代の活躍は頼もしく思うし、年代差を越えて大いに敬意を払う。一方、

自分だけの生き方を追い掛けたものに人生の方向が定められない若者も多い。かつては、会社に勤め、その道のプロとしての矜持を持っている社会人が多かった(多分大方の大人はそうしたプライドを胸に社会で活躍していた、と思う)。当時はすべての生産分野が右肩上がりであり、作れば作った分だけ売れる、という恵まれた環境下に活況を示していた。そうした環境こそが従事するスタッフに夢を与えていた。生きがいは「自分が社会に求められている」と実感することから生まれ、生きがいが将来の夢に繋がる。

現在では、大部分の生産フィールドでは、仕事の技術やノウハウのかなりの部分が機械に置き換えられ、宮大工・焼き物や精密工作機械といった特殊な隙間産業以外では人間の仕事は画一的に生産し続ける機械の監視とメンテナンスが主体となっている。職人芸が要求されることの少なくなつた生産現場では、仕事を介しての生きがいを求め

難くなっている(3Kを避ける労働者が極端に増えたことで、多くの生産業界が単純作業の機械への置き換えを進めたことで起きたこの現象には、労働に対する人の裏切りに対して産業がリベンジしたような一面がある)。

著者が別の農場事情を聞いた話は次のようなものである。  
ハローワークへの募集で、二〇代の若者と六〇歳を越えたヒトが応募してきた。二〇代は、一〇年近い引きこもりの経歴があり、六〇歳は定年退職者であった。

引きこもりの若者は会話が上手くはないが、三週間目時点でまだ頑張っている。一方、定年組は二日目には来なくなつた。つい数年前までは、採卵農場で若い世代を雇用することは難しかった。むしろ、シルバー世代に焦点を当てようとしたものである。

近年の多くの若者にとつては、「仕事を介した夢」といわれてもイメージが湧かないかもしれない。昨日(六月一日)の

夜九時頃のNHKバラエティ番組で、日本人とドイツ人が同じ会社に勤めた時の態度の差が話題になつていた。日本の大学を出て日本企業に勤めたドイツ人は、夕方五時に「サヨナラ」とばかりに退社する。それを見ていた日本人は「なんだ、アイツは! まだ誰も帰ってないのに……」と違和感を持つ、という。

この違和感を件のドイツ人に言うと、「私は生きるために仕事をするのであって、仕事をするために生きるのではない」と答える。日本人の意識にこそ違和感を感じる、という。

著者が親しく交わる農場のスタッフでも、自律性を活かせる業務体系になれば、それまで成り行き任せであつた勤務態度の若者の表情が、見る間に活力のある顔付きに変貌する。

育成担当であれば「体重分析の意味を考える」「育成率向上が貢献する利益性」、成鶏管理担当であれば「飼料効率向上の利益性」「サイズコントロールと飼料内容や温度との相関性」、

コンポスト担当であれば「コンポスト成分と栽培作物との関連性」「有機肥料の持つ可能性」等々を知ることにより、自分の仕事かどのように社会に貢献しているかを肌で感じられるようになる。

日本人にとつては、かつてはどのような業務に携わっていても、働くことに夢を重ねるのは、当たり前であつた。

先のドイツ人に代表される欧州人の「労働は神が人間に与えた罰である」という意識ベースと、日本人の「働くことが美德」という潜在意識とは、別世界ほどの差があるといえよう。

民族としての労働に対する美意識が共通認識とならなくなつた若い世代が「夢」をイメージできなくなつてきたこと自体を、日本社会全体が反省せねばならない。

著者が最近経験したこの傾向が正しいのなら、若者に生きがいを与えられるような職場に育て上げるのが経営者の義務であらう。